

浄土

1987-9

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別授承認雑誌) 第三二五号
昭和六十二年八月二十五日印刷 昭和六十二年九月一日発行

第五十三卷

九月号





九月の秀句

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり

飯田 蛇笏

忌日ある九月に入りぬ蝶燕

橋本 多佳子

彼岸果つる月夜鴉ぞ明るけれ

渡辺 水巴

|| 九 月 号 ||



青色には青光あり。黄色には黄光あり。赤色には赤色あり。白色には白光あり。

——『阿弥陀経』

目 次

法 話

- 無上道を志して 土 佐 舜 成 (2)
——お彼岸の心——
施餓鬼会のところ 江 目 達 雄 (6)

=江戸物語=(8)

- 江戸の文芸 細 田 隆 善 (11)
——俳 諧・川 柳——

《四 行 詩》

- 涼 し い 清 川 宗 治 (26)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) < 6 >

- 海と山の狭間で 木 下 隆 一 (28)
——一枚の紙片から——

◇◇長篇連載小説◇◇

- 立ち止まるな善導 第39回 寺 内 大 吉 (35)
不老不死
挿絵 松濤 達文

表紙絵「彼 岸 花」 松浦春子画

(法)

(話)

無上道を志して

—お彼岸の心—



「暑さ寒さも彼岸まで」とよく言われますが、季節の移り変わりはめまぐるしく、蟬時雨も止み、松虫、鈴虫の奏でる声にて秋風吹く好季節を迎えています。

日頃は仕事に追われて自身を顧ることもなく、お仏壇に手を合わせたことのない人でも、この時はお仏壇を掃除し又墓参してお花をあげ、お供物を並べます。

と
土 佐 舜 成
さ しゅん じょう

(財)国際仏教興隆協会常務理事
(神戸市阿弥陀寺住職)

○

彼岸とはサンスクリット語のパーラミター (pāramitā 波羅蜜多) の訳語で、正しくは「到彼岸」というべきです。自分の立っている迷い、悲しみ、切ない世界(此岸)から煩惱の滅した、悟り、理想の世界(彼岸)へお互いに行きましょうと教え導いてくださるのが彼岸会法要の意味合いです。

『涅槃經』には、「生死をもって此岸となし、涅槃をもって彼岸となす」と説かれ、中国(唐)の善導大師の『観經疏(定善義)』には、春分と秋分には太陽が正東から昇り、正西に沈むので、日没の彼方に浄土があると観想して、往生を願うべきであると諭されています。

この様に昼夜等分のどちらへも偏らないこの季節こそ、大自然が私たちに仏教の中道の精神として、「こだわらない、執らわれない、片寄らない」の思いを味わうべきでしょう。

そのために、六波羅蜜の行を実践すべきと説かれています。即ち、次の六つの実践徳目です。

布施 (dāna) めぐめ、施し)
持戒 (śīla) つつしみ、たしなみ)
忍辱 (kṣānti) 耐え忍ぶ)
精進 (vīrya) はげみ)
禅定 (dhyāna) 安らぎ、しずけさ)
智慧 (prajñā) 悟り、道理にあかるい)

その一つの布施については、『雑宝蔵經』にささやかな心掛けとして、「無財

の七施（財物を損なわずして大果報を得る）」と教えられています。

身 施（身体をもって人に尽くす、ボラン

ティア活動）

心慮施（心配りをする）

和顔施（笑顔で接し不快な表情をしない）

愛語施（柔軟な言葉づかい）

慈眼施（やさしい眼で接する）

床座施（自分の座席をゆずる）

房舎施（自身の部屋を貸し与える、たとえ

ば、外国人に対してはホーム・ス

テイを提供する）

ということですよ。

○

さて、潜越ながら私は昭和四十年から毎年インド国ビハール州ブッダガヤ日本寺、スリランカ国ガンパハ地区カダワタ

日本寺役員として彼の地へ管理運営のため出張いたしますが、インド日本寺では去る昭和五十二年以来、（社）日本仏教保育協会のご尽力で、現地の電気、ガス、水道も無い恵まれない聖地周辺の子供たちに、せめて字の読み書きが出来るようにとの思いから菩提樹学園（無料幼稚園）を創設。さらに昭和六十年十二月、大山善光寺大本願ご法主一條智光台下を初め各宗派の尼僧団、仏教婦人各種団体の尊いご支援によったオープンした光明施療院（無料医療施設）を開設いたしました。何しろ無料とあって二十料、三十料の道を遠しとせず、日によって百五十人、二百人と通ってくる患者たち、時間切れや人手不足を理由に炎天下の道を手ぶらで帰らせるわけにはいかない……という人道的大原則で頑張っています。

「現在こうして薬まで持たせて帰す無料医療施設が存在すること、その施設が日本僧を中心とした日本の仏教徒の手によって運営されているという事実は、単にインドの医療体制のみならず仏教者のあり方について聖地周辺の各国寺院の間に計り知れない感動と感銘をもたらしている」と地域住民の感謝はいうに及ばず、インド政府、ビハール州政府軍人の感激と賛辞が引きもきらずに寄せられていることです。私たち日本寺関係者、協力者は社会慣習のまったく違う日本とインドとの間での惹起するコミュニケーション・ギャップ、カルチャー・ギャップは筆舌に表せないものですが、今与えにれたこの仕事に仏恩報謝の念をもって、ひたすら後方のご支援を信じて持てる限りの努力を注いでいます。

なお、スリランカ政府は日本寺のあるカダタワの児童養護施設並びにタランガマの老比丘ホームが日本仏教徒の暖かい手によって出来たという感謝の意をもつて、三年前に飛び地に約五千坪の土地を無償提供して下さったことは、まさしく日本仏教界の布施行、菩薩道に対する現地政府の有難いご配慮だと者いさす。

○

お彼岸を迎えて六波羅蜜のせめて一つの布施行でも、ささやかながら仏陀お悟りの聖地、上座仏教国スリランカに一粒の種を蒔くことのできたこと、やがていつの日か大きな実を結んでくれることと信じます。

(話)

施餓鬼会のころ

(法)

江 目 達 雄
（山形市迎接寺住職）



おぼんの前後に、あるいは秋のお彼岸の頃にかけて、ほとんどの宗旨の寺々で、施餓鬼会が行なわれます。

施餓鬼会は、また施食会とか冥陽会などともいいます。

餓鬼道におちて飢渴に苦しむ亡者たちに、仏の大悲によって飲食を施し、その善根功德をめぐらして、祖先の霊を供養し、また、自

らの仏果に資する法会とされています。

施餓鬼会のいわれについては、つぎのような故事か、經典に説かれています。

—— お釈迦さまの十大弟子の一人である阿難尊者が、ある夜、静かに瞑想していました。すると、どこからともなく焰口餓鬼という口から火を吹く恐しい形相の餓鬼があらわれ、「お前は、あと三日で死に、餓鬼道に墮

ちるであらう」といって、立ち去りました。

おどろいた阿難尊者は、いそいそでお釈迦さまのところまいりますと、お釈迦さまは、餓鬼道に堕ちた者たちのために施食の法会を行ない、その苦しみを救うがよい、それは、お前自身のためにもつながるであらうと、教えられました。

阿難尊者は、その教えにしたがって施食の法会を営み、餓鬼たちの苦しみを救い、その功德によって、自らも長寿を全うすることができたと、説かれています。

この施餓鬼会の教えと修法が、我国にも伝えられ、鎌倉時代の末頃には諸宗の間で行なわれるようになり、いまにいたっているわけです。

ところで、餓鬼道とはどこにあり、どんなところなのでしょう。

仏教では、六道ろくどう、即ち地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天の六つの迷いの世界があり、衆生は、生前の業因ごういんによって、この六道を果てしなく輪廻りんねすると、説いています。

六道の中でも、地獄、餓鬼、畜生は、殊に苦しみの大きい不浄の世界で、このため三悪道、三惡趣あるいは三塗さんずといって恐れられています。餓鬼道は地獄につぐ苦の世界、飢餓そのものの世界です。

平安時代の中期、比叡山横川の沙門恵心僧都源信（九四一—一〇一七）は、「往生要集」（三巻）を著わして、「厭離穢土欣求淨土えんりえどこんぐじょうど」の淨土思想を説き、当時の人々の心をつよくひきつけました。

「往生要集」は、六道即ち穢土の有様をつぶさに叙述し、ついで、うるわしい西方極樂淨土のすがたを描いて、穢土を厭い、淨土を欣び求めよと、教えています。

六道では、まずおそろしい地獄の様相からはじまり、ついで餓鬼道に移ります。ここでは、前世の悪業に応じて、さまざまな飢渴の苦しみをうける餓鬼どもの有様が、描かれています。

食物があっても食うことができず、自分の頭を破って脳を食うもの

口は針のように細く、腹は山のようにふくらんでいて食物を食うことができないもの
僅かな食物でも、口にしようとするときたちまち焰となり、身を焦すもの

こんなおぞましい餓鬼のすがたが、いくつもいくつも描かれています。

そんな餓鬼道とは、いったいどこにあるのでしょうか。「往生要集」は、「一は地の下五百由旬にあり。閻魔王界なり。二は人・天の間にあり」と書いています。即ち一つの餓鬼道は、果てしない地の底にあるが、もう一

つの餓鬼道は、この人の世にもある、私たちは気付かないでいるが。餓鬼たちは、この世にもうろうろしている、というのです。

鎌倉初期の六道絵の一つに、「餓鬼草子」という絵巻物があります。醜悪怪異な餓鬼たちのすがたを、真に迫って描き出し、見る者を慄然とさせます。

その「餓鬼草子」に、貴族たちの酒宴の様子を描いた図があります。白拍子を侍らせて酒を酌みかわす貴族たち。ところが、その一人一人に、なんとも薄気味の悪い餓鬼が、一匹ずつとりついていっているのです。しかし貴族たちは、少しも気づいた様子もなく、酒宴に興じています……。

この絵はなにを語ろうとしているのでしょうか。

この世の悦楽のはかなさ、みにくさなのでしょうか。それとも、人々の貪欲な欲望を、

餓鬼のすがたでしめしているのでしょうか。

「往生要集」でも「餓鬼草子」でも、餓鬼道は、悪業の報いとしてまさに堕すべきあの世の、苦の世界です。しかし、それとともに、実は己れの心の中にひそむ、あの貪欲なものであることを、示唆しているようにも思われます。

施餓鬼会は、施しの法会です。有縁無縁の餓鬼への施しによって、布施のとうとさを教える法会ということが出来ます。

仏道の修行で、布施は極めて大事は徳目です。迷いの世界から悟りの彼岸へと達するためには、六度の行、即ち、六波羅蜜はろみつを修さなければなりません、その六波羅蜜でも、まず最初に布施をあげています。

お釈迦さまの前生の物語、「ジャータカ」には、すべての財貨を施し、ときにはその命

をも犠牲にして、衆生の苦しみを救う物語が数多く語られています。

布施とは、善行や財貨の無償の施しです。相手の返礼を望んだり、世間の評価を期待するものは、もはや布施とはいえません。

布施は、慈しみのところ、即ち、慈悲の行なのです。

あたかも、母が己が独り子を命を賭けても護るまもるように、このように一切の生きとし生けるものどもに対しても、無量の慈しみの意こころを起すべし。

（中村元訳「ブツダのことば」ハスッタニパ

ータⅤ 一四九）

仏陀は、慈悲について、こう教えられています。布施は、慈悲の心をもって、生きとし生けるすべてのものに対し、その苦しみや悩

みに耳を傾け、差別なく施しを行ふ行為です。

布施は、金や品物の施し、即ち、財施ばかりではありません。人に正しい道を説くことも、悩む人に励しの言葉をかけるのも、難渋している人に手を貸すことも、バスや電車で席をゆずることも、和やかな顔、やさしい言葉も、みな布施の行ないです。このような行ないは、ときには、財貨の施しにもまして、勇氣のいることかもしれませぬ。

人間の欲望には、きりがありません。私たちの貪^{ひさば}りの心は、際限なく欲望の満足を求めます。しかし、欲望のすべてを満たすことはとてもできないことです。貪欲な貪りの心はつねに欲求不満をともない、心の不安をかきたてます。

金貨^{こがね}の雨を浴びるとも

諸欲は飽くことなし

されば

少分^{わづか}なりとも

諸欲を味うは

くるしみなりと

賢者^{かしこきひと}は知れるなり。

(友松円諦訳「法句経」一八六)

どんなに多くの黄金を積んでも、欲望を満足させることはできない。されば、小さな欲望でもこれを味うとき、かえって苦しみになるのだ、と「法句経」は説いています。

貪りの心は、しがみついた執着の手のようなものです。それが、私の中の餓鬼なのかもしれませぬ。

仏の大悲によって餓鬼たちに施しをする施餓鬼会は、私たちの貪りの心を反省し、布施を行ふことによって、しがみついた執着の手をとき放すことを教える法会です。

江戸物語

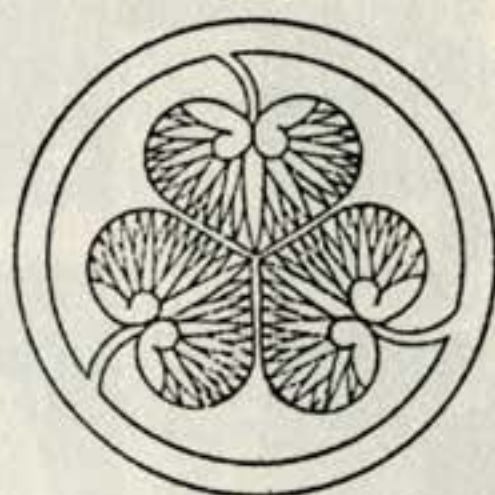
(8)

江戸の文芸

俳諧・川柳

細田隆善

(俳号・豊明)



草いろいろおのおの花の手柄てがらかな

芭蕉

先年レーガン大統領が日米友好親善のために来日せられ、国会において一時間余りにわたり講演せられた折、「自由」を説明するためにこの芭蕉の句を引用された。この芭蕉の句は貞享五年（一六八八）八月更科紀行旅立ちのとき美濃（三重県）にて弟子たちと別れ、おのおの個性のある俳諧精進を称えた句である。「草いろいろ」が秋

江戸は全国総城下町
江戸は世界一の人口
江戸は日本の縮図
江戸で日本の富の半ばが消費
江戸文化の出現

の季題、秋草とも千草ともいう。さまざまな秋草が色とりどりに美しい花を咲かせているように、自由は人々そ



——芭蕉生誕の地の史跡
(上野市) ——

れぞれの良さを發揮して、競い咲き・持ち味を生かすところにはすばらしさがあると大統領は説明された。この点は仏典の説くところと相通じている。俳句が世界最短の詩であり日本文化の持つ特色でもあるから引用されたのであるが、俳諧樹立した芭蕉の名は今や世界に知られるようになった。わが国で芭蕉といへば小学生も知っているほどわが文芸の中で最も知名度が高い。また芭蕉の句碑は全国に二千基を越えており、句碑のないのは沖縄県だけである。碑の数ではいかなる歌人も俳人もこれには遙かに及ばない数である。近年は旅行ブーム、旅を住処

とした芭蕉にも通じ、奥の細道ブームとなっている。来る昭和六十四年は芭蕉奥の細道の旅の三百年祭である。この俳聖といわれる芭蕉は江戸深川の芭蕉庵を本拠として活躍し、俳諧は江戸文化の特色ある所産である。

芭蕉の生涯をたどってその業績を眺めてみることにする。芭蕉が生れた月日はさだかでないが、上野市赤坂町(三重県)に「芭蕉翁生誕の地」と記された芭蕉の生家が保存されている。芭蕉は正保元年(一六四四)に生れ幼名を金作、長じて甚七郎、忠右衛門、宗房(俳号はそうぼう)などと称した。父の松尾与左衛門は無給士分の「無足人」という地侍であったという。そして平家の末流ともいう。母は桃地氏、兄は半左衛門で、芭蕉の来訪をよく過したという。姉一人(早世)妹二人であった。しかし生誕の地は隣りの柘植町であるともいわれている。承応二年(一六五三)芭蕉十歳のとき上野の侍大将五千石の藤堂良精の嫡子、良忠の小小姓として出仕したことが、芭蕉の大きな転機となった。良忠は芭蕉より二歳年長、病弱にして武芸より文芸を好み、京都の北村季吟に師事して俳句を学び、俳号を蟬吟と称した。主従ともども季吟に当時流行しはじめた俳諧を学んだのであるが、寛文

芭蕉庵

古

性

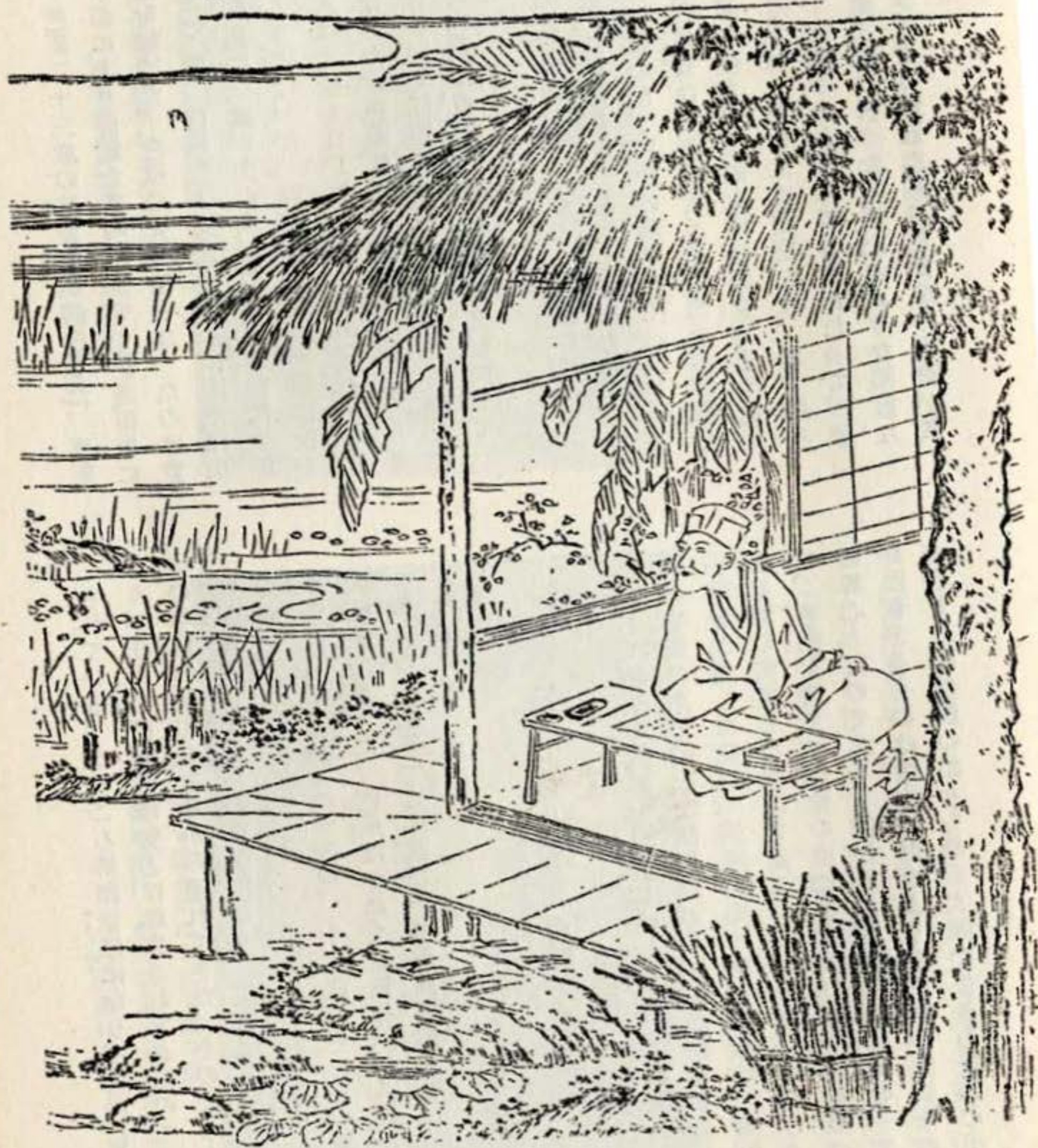
飛

とむ

の

音

桃青



— 深川芭蕉庵の芭蕉 —

(「江戸名所図会」)

六年（一六六六）芭蕉二十三歳の時良忠が病没した。芭蕉は生家を去り京都に上り俳諧を季吟、漢学を伊藤担庵に学び諸学の勉学を続けた。芭蕉の大転機となったのは寛永十二年（一六七二）春、芭蕉二十九歳のときに江戸に出たことである。芭蕉は二歳年上の大阪の井原西鶴に生涯対抗意識を持つようになった。西鶴は芭蕉一年前に没してをり、この二人は大阪と江戸においてそれぞれ天下に名をなすようになった。芭蕉は新興大都市江戸を目差し、句集「貝おほひ」を江戸に持参して刊行し情熱を燃やした。このころ芭蕉は貞門風から談林風に転向していた。

延宝三年（一六七五）芭蕉三十二歳のとき談林派の祖である西山宗因が江戸に来たとき、温かくこれを迎え、俳号を宗房から桃青に改めた。芭蕉の名声は江戸で高まり、宝井其角、服部嵐雪などぞくぞくと入門者が増加し、近くにいた芭蕉の協力者である山口素堂もともに句会を開き、芭蕉の生活はしだいに安定した。延宝四年（一六七六）芭蕉三十四歳のときから四年にわたって、小石川（文京区）の水道工事に携った。書記のような閑散な水役であったという。その付近に関口芭蕉庵の史跡が残

されている。このころ俳諧宗匠になり、門人も多くなり、江戸の芭蕉俳壇勢力は確立されてきたのである。この年甥の桃印を故郷から連れてきた。そのころまで杉山杉風や小沢卜尺らの世話になり、住居は江戸を点々としていたようだ。

延宝八年（一六八〇）芭蕉三十七歳のときも芭蕉生涯の大転機であった。芭蕉はかねて談林からの脱皮を考え芭蕉風の「佗び」と「寂び」の蕉風の確立を目差した。この年の秋

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

芭蕉

と吟じて枯淡の世界を追求しはじめた。その年の冬、杉風の生簀のある閑寂な深川村の六間堀に移り、その番小屋を改造した狭い一部屋の庵に移り住んだ。俳諧宗匠としての安定した生活を捨て、家庭妻子を持つことも捨て、名利を捨てて風雅の道に進み、ひたすら蕉風の確立に専心したのである。住むところは九尺四方の一部屋、身にまとうものは雲水僧侶のような法体の簡素な姿、食するものは雑炊の如きもの、人間の生きる最低の生活で

あった。翌年門下の李^り下^かが草庵に芭蕉を植え、これがよく育ち四季に変わる姿が美しいので芭蕉はこれを愛好し、俳号を芭蕉と号し、草庵も深川芭蕉庵と称するようになった。

深川芭蕉庵のあった地点は明確でないが、現在の芭蕉記念館のある常盤一丁目の中であることは江戸の切絵図



——「ふる池や蛙飛びこむ水の音」

(芭蕉記念館築山・安永二年、

深川親和書の模刻)——

を見ても間違いはない。明暦大火(一六五七)後の江戸都市再開発事業により、芭蕉没後この一帯が武家屋敷になったため、中に入れず芭蕉庵の跡を尋ねることができなくなった。明治になって一般市街地になり草庵のあったところが依然として不明であったが、大正六年大津浪のあったとき、小名木川河口の万年橋の北側で、芭蕉が生

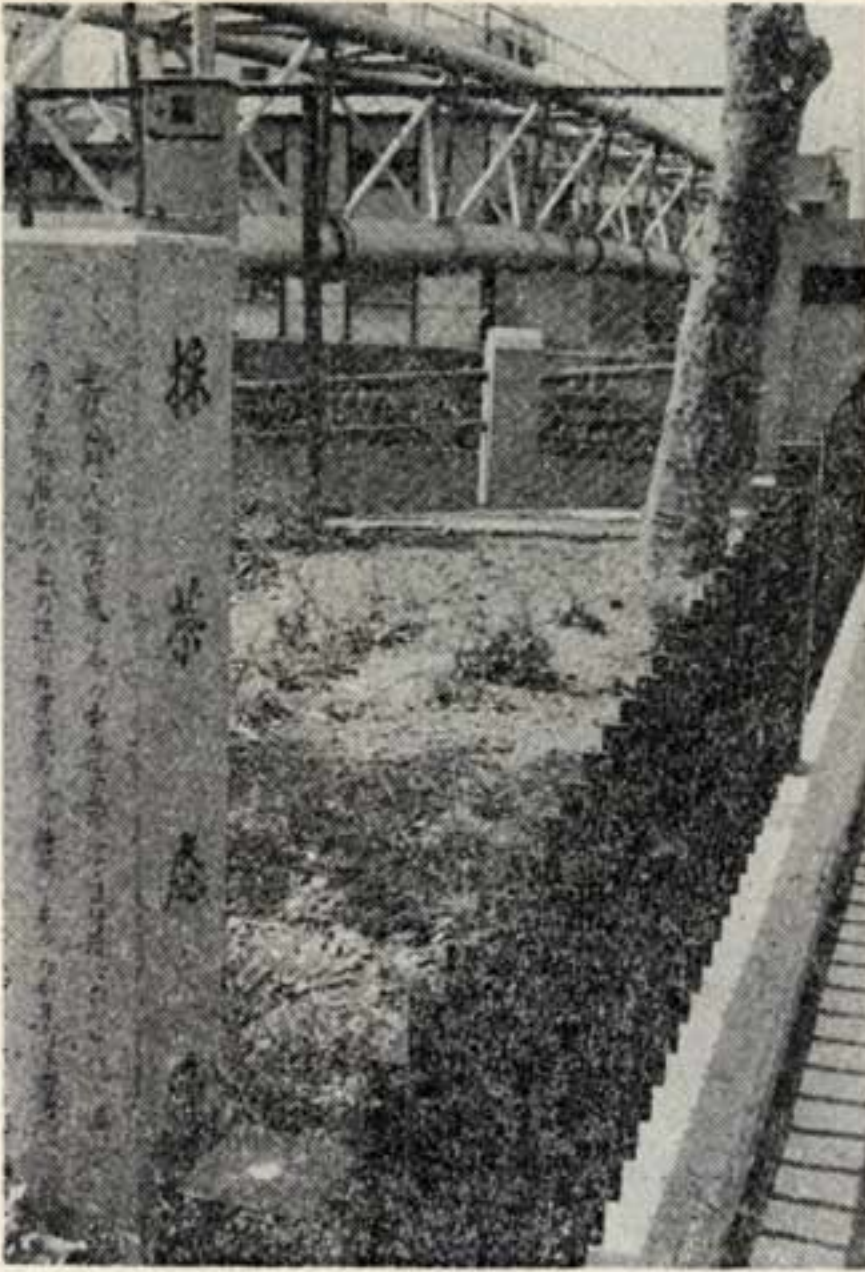


——「草の戸も住みかはる代ぞ雛の家」

(筆者庭内、奥の細道出発点採茶庵

の旧跡に近いところ)——

前愛好していたと伝える石の蛙が出てきたところからそこを東京府は深川芭蕉庵の旧地として史跡指定をした。この旧地が六坪ほどの狭い土地であるので、昭和五十六年春、江東区が少し北よりの地に芭蕉記念館を建設し、史跡もここに移した。筆者は当館の建設に協力ししばらく勤めたことがあるが、当館に芭蕉関係資料数千点があり常時展示し、句会や江戸文学研究に開放している。江



——奥の細道出発点・採茶庵旧跡

(江東区平野一丁目海辺橋付近) ——

戸時代ここは松平遠江守であったが、芭蕉庵は保存されていたようだ。明治の洋画家、書道家の中村不折の祖父が松平家に出入りしていたので、祖父から芭蕉庵の様子を聞きスケッチしたのが残っている。芭蕉没後、全国からこの草庵を尋ねる人が多いので、雪中庵系の門人たちが松平家の隣地に芭蕉庵を建て旧地にあった芭蕉愛好の青石を飾り、安永二年(一七七三)七十三歳の江戸書道の



——奥の細道終焉の地の旧跡

(大垣市) ——



——深川芭蕉庵のあった紀伊武家屋敷
 <芭蕉庵の古跡庭中にありと記す>
 (文久二年「江戸切絵図」)——

大家三井親和(深川にいたので深川親和という)にその青石に芭蕉の古池の句を書して刻んだ。文政九年(一八二六)の平一貞著の「埋木花」にこの芭蕉庵の情景がスケッチされている。この芭蕉庵は幕末か明治に滅失し、古池の

句碑だけが近くの要津寺(墨田区千歳)に移されて現存している。この句碑の写しが芭蕉記念館の築山に建っている。近年は芭蕉ブームのため全国の芭蕉縁りの地に芭蕉資料館がつぎつぎ建設されるようになった。

天和二年(一六八二)芭蕉三十九歳のとき、八百屋お七の江戸の大火がありその火焰は隅田川を渡って深川芭蕉庵を焼失した。翌年芭蕉庵は山口素堂や門弟たちによって再建されたが、この大火により芭蕉は人生火宅の如き無常感をおぼえ人生を旅として以来漂泊の旅の生活が始まるのである。また本所深川の市街地造成の工事が進み静かな深川も市街地化するようになり都塵を嫌うかの如く旅に出るのである。かつ近くの臨川寺(江東区清澄三丁目)の仏頂禪師と交友が深まり、朝夕そこで坐禅を組み、無我無心の境を目差し、無所住の旅に思いを致すようになった。貞享元年(一六八四)芭蕉四十一歳のとき「野ざらし紀行」(甲子吟行)の旅に

出た。貞享三年（一六八六）芭蕉四十三歳の春、芭蕉の代表句といわれる古池の句を吟じた。

古池や蛙飛びこむ水の音

芭蕉

翌年八月「鹿島紀行」（鹿島詣）の旅に出で、十月は「笈の小文」の旅に出た。ついで翌年の春、吉野の花の旅に出で、八月「更科紀行」の旅に出た。元禄二年（一六八九）芭蕉四十六歳のとき、永年の夢であった奥の細道の旅に出た。三月上旬深川芭蕉庵を人に譲り、杉風の別墅、採茶庵（江東区平野二丁目海辺橋付近）に留り、曾良を伴って三月二十日、採茶庵前の仙台堀川に舟を浮べ隅田川を上り千住に（足立区）上り、またここに留り三月二十七日春日部（埼玉県）に泊り、奥の細道の旅を続け、九月五日大垣に至るまで半年間の旅の紀行が「奥の細道」である。わが国紀行文中最高と称せられこの文中の芭蕉の句五十一句が光彩を放つ芭蕉の名句であった。

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家（芭蕉以下略）

行く春や鳥啼き魚の目は泪

あらたふと青葉若葉の日の光

田一枚植ゑて立去る柳かな

夏草や兵どもが夢のあと

五月雨の降りのこしてや光堂

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

五月雨を集めて早し最上川

象潟や雨に西施がねぶの花

荒海や佐渡によこたふ天河

一家に遊女も寝たり萩と月

あか／＼と日はつれなくも秋の風

塚も動けるわが泣く声は秋の風

むさんやな甲の下のきりぎりす

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

元禄三年（一六九〇）芭蕉四十七歳のとき、膳所（大津市）の幻住庵で「幻住庵記」を書き、翌年は去来の落柿舎（京都）で「嵯峨日記」を書いた。さらに翌年五月、新築された深川芭蕉庵にあって「芭蕉を移す詞」「芭蕉庵三日月日記」を著した。元禄六年（一六九三）芭蕉五十歳の三月、深川芭蕉庵で甥の桃印が死去、七月「閉関の辞」

深川六間堀

芭蕉庵の

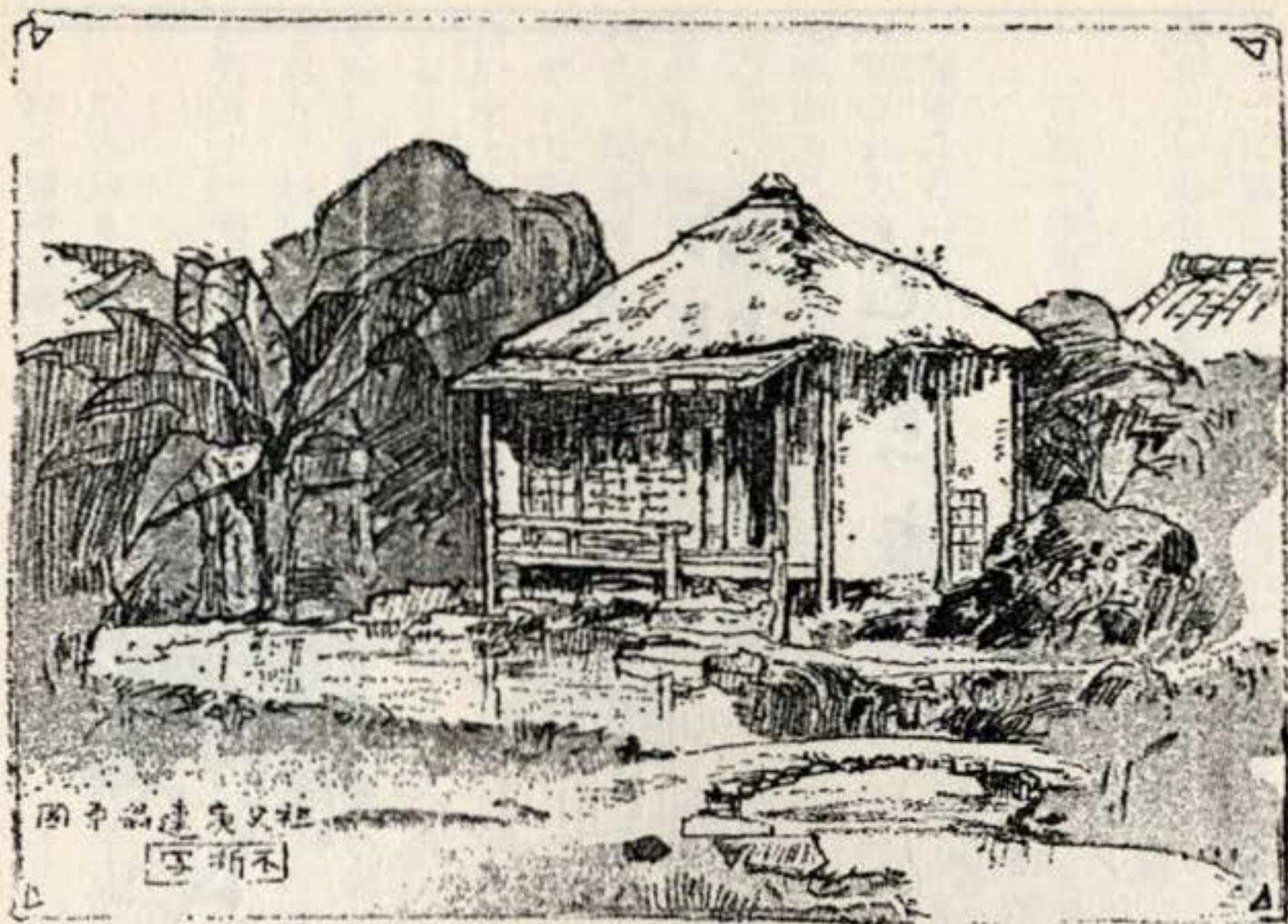
旧蹟

青石四尺程

古池や
芭蕉の
あのおも



——深川芭蕉庵旧地の隣りにあった芭蕉庵
平一貞著「埋木花」文政九年——



——武家屋敷の中に保存さへていた深川芭蕉庵（中村不折画）——

を書き芭蕉は人に会わなくなった。このころ寿貞とそ
子芭蕉を頼って来た。

元禄七年（一六九四）芭蕉五十一歳のとき、五月寿貞を
深川芭蕉庵に置きその子、次郎兵衛を伴って最後の旅、
関西の旅に出た。六月寿貞が死去した。九月大阪の園女
宅に立ち寄り、病気になる、十月十八日に大阪御堂前に
移り、つぎの辞世の句を吟じた。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

芭蕉

十月十二日午後四時ごろ五十一歳で永眠し、遺体は遺
言によって義仲寺（大津市）に埋葬された。会葬者は江戸
からかけつけた其角をはじめ三百余人も立合った。

芭蕉は在世の頃から全国に名をなし多くの弟子がい
た。各地に旅をしたときも弟子たちが心温く芭蕉を遇し
たのである。弟子の数は其角は二千余人といい、曰人は
四百三十余人と名をあげている。その中で主要な弟子十
人をあげて蕉門十哲という。その十人は流派によって若
干異なるが蕉村はつぎの十人の名をあげている。

其角・嵐雪・支考・許六・去来・丈草・野坡・越人・

北枝・杉風ほくし きんぷう

芭蕉なきあとこれらの門流が江戸俳壇をはじめ地方の俳壇の発展に力を尽したものである。

芭蕉は数多くの名句、数々の秀れた紀行文、「猿蓑」さるみのなど数多くの句集・書簡文を残し、わが国文学史上巨大



——深川芭蕉庵旧跡の石の祠

- ①芭蕉木像と②芭蕉石像と
③芭蕉が愛好した石の蛙

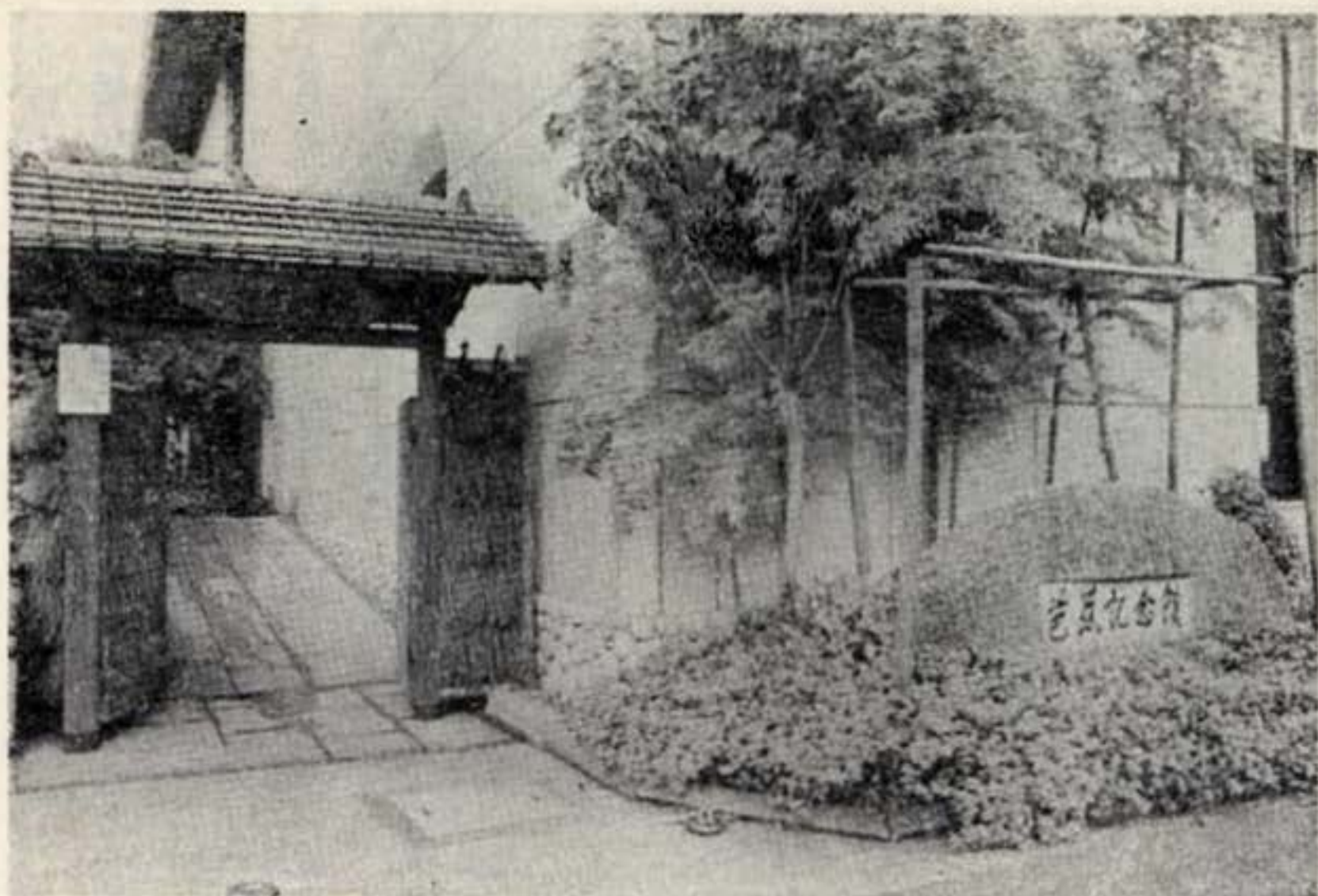
(昭和初年写②と③は芭蕉記念館に

保存、①は所在不明) ——

な足跡を残した。俳風も天和風、貞享風、元禄風と発展し「かかろみ」風となって不易流行論を述べたが、一貫して風雅の道、蕉風の確立であった。「笈の小文」けいこのぶんの中に、西行の和歌、宗祇の連歌、雪舟の絵、利久の茶に一貫した風雅の道を大切にしたのである。江戸時代は文人

も財界人も歌舞伎役者も俳号を持ち俳句をたしなんだのである。芭蕉ほど後世に影響を与えた文人も数少ない。現在俳句人口は八百万人といわれ諸芸の中でも最も数が多い。しかも文芸の庶民性を高めたのである。俳諧は芭蕉によって江戸文化から生まれた庶民文芸である。

王朝文学以来盛んであった和歌に對して、江戸時代文人の間に狂歌が盛んになった。これと同じように江戸中期から俳諧に對して川柳が盛んになったことも江戸文化の大きな特色である。俳句が連歌の俳諧体から独立したように、川柳も連歌の前句



——芭蕉記念館（深川芭蕉庵旧跡・江東区常盤一丁目）——

付から発展し俳諧から別れて、江戸中期以降新しい庶民文芸として発達した。江戸っ子気質の手短かな省略風の寸鉄性を大切にする江戸的なものの所産である。川柳という言葉は明治以降で、これは江戸川柳を生みの親である柄井川柳の名から出た芸名称である。初代柄井川柳は、享保三年（一七一八）浅草竜宝寺門前（台東区）の名主八右衛門の子として生れた。宝暦五年（一七五五）名主役となり、同七年前句付点者として活躍、寛政元年（一七八九）まで三十三年間にわたり寄句、約三百万句に達した。その間「誹風柳多留」（初編から二十四編まで）選集し、選者として活躍し川柳はあまり作らなかった。寛政二年（一七九〇）七十三歳を以って没し竜宝寺に葬られ、そこに墓が現存している。つぎの辞世の句碑が同寺に、五世川柳が天保十年（一八三九）に建立し、現在のは三代目の句碑である。

木枯や跡で芽を吹け川柳

川柳

江戸時代川柳の万句会興行というのが大当り、川柳の事務所から出題の前句、締切日、投句料が発表され、応

募作品を選者が選び、入選句を本版一枚刷で発表、入選句には賞品（現金に変えられる）を与えられる。一句が高点を取れば会費の五十倍、百倍の賞金となり、射幸心^{しゃこうしん}を大いにそそって盛んとなった。この入選句の中から佳句を選んで「誹風柳多留^{やなぎだる}」が明和二年（一七六五）刊行された。これは星運堂花屋久治郎が木版刊行したもので呉陵^{ごりやう}軒可有^{けんあるべし}がこれに協力し、川柳史上画期的な著書となった



——初代柄井川柳の句碑

（台東区・竜宝寺）——

明和二年（一七六五）から天保十一年（一八四〇）まで七十余年間に、柳多留は百六十七篇が刊行され、これが川柳のルーツとなった。一回に一万句も集ったので万句会といい、企業的にも成立し、江戸の大評判となった。作者名は出さないのが普通であった。

かみなりをまねて腹かけやつとさせ
鰻買^{うなぎ}て余所^{よそ}のながしへ持てゆき

（初篇）
（初篇）



——柄井川柳——

此部屋に一人寝ますと氣をもませ
寝て解けば帯ほど長いものはなし
うららかさ頻りに錢がほしくなり

(二篇)

(三篇)

(十七篇)



——西島○丸(宮尾しげを画)——

明治になると射幸心をそそる古川流から脱皮し、短歌俳句が正岡子規によって新運動が展開されたように、川柳も新しい発表の時代を迎え、阪井久良岐と井上剣花坊が活躍し、現在また川柳ブームを引き起すことになった。明治、大正、昭和の三代にわたって川柳会に大活躍した浄土宗の住職がいた。深川の西島○丸である。○丸は靈巖寺塔頭の成等院(江東区三好一丁目)の住職であったので○丸と号した。○丸は川柳の天才、十四歳から活躍、二十代で川柳会の大家の称をうけた。川柳多作者として右に出るものがなかったが、喜寿を前にして昭和三十二年没した。

母のする通りに座る仏の灯

○丸

ボーフラのけいれんめいて皆おどり

○丸

今月は殺されず以下次号

○丸

葬式を済ませてからの三つ巴

○丸

俳句は深川、川柳は浅草、俳諧川柳は江戸の下町に咲いた江戸文芸の華でもあった。

(つづく)

住職待望の回向文集、増刷ができました

新 諷 誦 撰

編集

白金ブディストクラブ

監修

竹中信常

大室了皓

山本康彦

装丁 豪華クロス張り

コンパクトサイズ

(タテ 十九・三センチ ヨコ 八・二センチ)

内容 諷誦文 十編

下炬文 二編

定価 二二〇〇円 (送料共)

お申込み

〒114-1 東京都品川区上大崎一-九-1-1

戒法寺内 白金ブディストクラブ

TEL 〇三(四四一)八九七一

FAX 〇三(四四一)八七〇二

四

行

詩

涼
し
い

みほとけからの贈り物
虫の声を乗せて
こころにしみ通る
秋の初風

清^{きよ}
川^{かわ}
宗^{そう}
治^じ

(詩人)



◎“維持会員”へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。すでに『浄土』誌は五十三巻に入り、鑽仰会創立以来五十五年をけみしてきました。近年は、弊会の活動も、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して預いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進をお誓いいたすところです。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、ここに心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

ったか。後に新幹線の岐阜羽島駅を作らせた人だから、そのくらいの事はやり兼ねない。そう言えば三木トリロー作詞作曲の「僕は特急の機関士で」という歌がはやったのもこの頃だったな、などと愚にもつかぬ事を思っているうちに、急に当時の列車運行について知りたくなった。そのためには昭和二十五年九月現在の時刻表が必要になる。交通博物館ならあるだろうと見当をつけて電話すると、図書の閲覧は日曜・祭日だけという事で、残念ながらこの稿の締め切りには間に合わない。国会図会館なら確かだろうと思ったが、ここでもはかばかしい返事は得られなかった。となると、ますます見たくなるのが人情で、片っ端から都内の図書館に電話して、何館目かの新宿中央図書館で、二十五年十月号の復刻版でよければ取っておくがどうかと言われて、僅か一月の違いだからどういふ事もあるまいと思ひ、感謝して早速借りにいった。

「時刻表復刻版（戦後編）」は、日本交通公社出版事業局が昭和五十二年九月十五日に発売した物で、昭和二十二年六月号、二十五年十月号、三十一年十二月号、三十六年十月号と、鉄道運輸年表というのがセットになって箱に収められており、箱には定価五千元（分売は致しません）と書かれていた。先ずお目当ての二十五年十月号を開く。大改正号と大書されているので悪い予感がしたか、果たして十月一日にダイヤの大改正が行われて、「つばめ」「はと」とも一時間スピードアップし、八時間運行となっていた。

「鉄道運輸年表」によれば、我が国に特別急行列車が誕生したのは、昭和四年九月十五日であった。東京―下関間を一・二等特急「富士」と、三等特急「桜」が二十二時間四十分

かけて走っている。更に昭和五年十月一日には、東京―神戸間に「燕」が新設され、九時間間で走っている。昭和二十五年の九月のある日、父が乗った「はと」は草創期の特急よりものろかった事になる。

昭和十九年四月、戦争の悪化で貨車輸送に全力を注ぐために、特急と食堂車が全廃された。特急はともかく、この時まで食堂車が存在していた事が私にはショックだった。また年表は、食堂車の全廃に伴い、主要列車内、ホーム及び構内食堂で五目弁当を販売、とも記している。十九年四月と言えば、私が愛媛県の松山中学に入学した年である。郊外に海軍の航空基地があったせいで、松山市の食糧事情は逼迫していたし、予讃線の松山駅で弁当を売っていた話は聞いた事もない。予讃線というのは、いまも昔もローカル線だったのだ。弁当の中身については問わないにしても、この五目弁当、外食券何点で購入できたのであろうか。いまとなっては調べるすべもない。

戦後特急が復活したのは二十四年九月十五日で、「へいわ」と名付けられた列車は東京―大阪間を九時間で走り、翌二十五年一月一日、「つばめ」と改称された。更に同年五月十一日には同じ路線に「はと」が増発されている。「へいわ」と共に、食堂車も復活した。紙片の食堂車（日本食堂経営）の御案内というのを参考までに記すと、朝の定食Aが料理一品、果物、コーヒー、パン（バター付）一二〇円。Bは料理が一品増えて一八〇円。昼夕食のAは朝食Bと同じで一八〇円。但し料理が変わるのかどうかは不明。Bは料理二品、果物、コーヒー、パン（バター付）二四〇円。好み御飯定食（外食券引換）は四八円より七

二円まで、となっている。わざわざバター付と断っているのが興味を引く。バターは当時貴重品だったのである。あの頃、麺類を食するには粉食券なる物が必要だったが、パンは除外されていたのであろうか。お好み御飯定食というのは、カレーライスか丼物の類であらう。

お好み一品料理を見ると。意外に種類は豊富である、ハンバーグステーキ、フライドフィッシュ、ハムサンド、チーズなど六〇円。ビーフカツレツ、ポークカツレツ、ハムエッグス八〇円、ビーフステーキ、コールドビーフ、ポークグリル、チキンカツレツ、ヤサイサンド、スチューなど一二〇円。サーロインステーキ、ロースビーフ、ポークケチャップ、グリルチキンなど二四〇円。牛豚に比べて鶏が高いのは、全般に品薄だったのかもしれない。飲み物では特級酒一八〇円、一級酒一五〇円（いずれも一合）。ビール一本、淡色一九〇円、黒大一九五円、黒小一一〇円。黒ビールで売り出された頃であったか。ウキスキ一杯（三十㏄）八〇円。サイダー一本四五円。レモネード、ジンジャエール一本四二円。カルピス一杯三〇円。コーヒ一杯五〇円。紅茶一杯三〇円。菓子、果物時価などとなっていて、飲食物の値段には二割の遊興飲食税が含まれている事が付記されている。カルピスだけが堂々と商標名で書かれているのが目につく。

また「御弁当御持参の方も御自由に食堂を御利用下さいませ」と書かれているのも、当時の食糧事情を偲ばせてほほえましいが、いまどきそんな事をしようものなら、追い出されるのが関の山である。

昭和二十五年九月と現在を比較してみると、特急の東京―大阪間の所要時間は約三分の

一に短縮されたが、二等（現グリーン）の運賃は約九倍になっている。いま九時間走ると、「ひかり」で東京から博多まで行き、とんぼ返りして西明石近くまで戻って来る事ができる。また大阪までのグリーン料金一万八千五百円で二十五年に旅をすれば、特急二等を利用したと仮定して単純計算した場合、東京―鹿児島間を往復し、東北本線で青森へ出、青森から奥羽・羽越・信越・北陸・東海道の各本線経由で大阪へ。大阪から福知山線・山陰本線を使って下関へ、更に下関から山陽・東海道本線経由で愛知県の大府辺りまで回遊する事ができるのである。全長実に約四千七百五十三キロ、これはあくまでも仮定の単純計算であるから、実際には北海道と四国を除く国鉄の主要幹線はほぼ網羅できたのではないだろうか。

一枚の紙片から、思いがけない事実が判明した。二四〇円のサーロインステーキの厚みも気になるが、他の物に比べてアルコール飲料の値上がりのカーブが緩やかなのは意外だった。昔の値段が高すぎたに違いない。

いまは金で時間を買えるようになった反面、国土はますます狭くなり、旅は一層味気ないものになってしまった。思いは次から次へと展開するが、ふとこんな情景が目に見えかねた。この年の六月に登場したばかりの「ミスはと」のお嬢さんから手渡された紙片を「李太郎詩集」に挟むと、父は席を立った。食堂車でビールでも飲みながら、詩集の続きを読むと思ったのである。

汽車は、夕景の蒲郡あたりを過ぎようとしていた。

◎「浄土」表紙版画絵販売についての案内

『浄土』九月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、色調を変えて好評な松浦春子先生の清楚な作品を頂戴しております。松浦先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、一昨年度の小林治郎先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋二―二―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

立ち止まるな善導

〈39〉

寺内大告

挿絵・松 海 遠 文

不老不死

七

仰ぎおもんみれは釈迦はこの方（かた）より発遣（はっけん）し、弥陀は即ちかの国より来迎したまう。かしこに喚（よ）び、ここに遣（や）る。あにさらざるべけん

や。ただ勤心に（つとめて心に）法を奉じて畢命（ひつみよう）を期となし、この穢身（えしん）を捨てて、すなわち彼の法性の常樂を証すべし。

善導は嚙んでふくめるようにこの偈の意味を王徐明たちに説明していった。

仏祖である釈迦は大衆を救おうという目的



で仏法を開明させられた。つまりその立場からわれら衆生へ向いて慈悲の手をさしのべて来られる。阿弥陀仏はまた、救いの安養地である西方の浄土から、われら衆生をお迎えにきてくださる。

釈迦と阿弥陀仏の二尊は、かくも全身全霊を傾けてわれら衆生を救おうとなされているのではないか。声を限りに呼びかけ、暖かい手をさしのべてくれるのではないか。

なぜわれら衆生はこの愛にこたえようとはしないのか。一刻も早く仏法を身につけ修業をつんで、汚れた身を洗い清めて、仏の国へ参じようではないか。

善導の言葉に耳を傾けながら、方士王徐明は胸でくり返し誓っていた。

釈尊の仏法とやらは、よく理解できない。また阿弥陀仏の慈悲にも信じきれないものがある。しかし善導和上よ、わたしは貴僧のあとだけは蹤いてゆきます。貴僧のゆく道だけ

を歩きますよ。

善導のあとを、どんなことがあっても蹤いてゆく。

そう誓った王徐明は、さっそく「斗姥閣」にこもりきって不老不死の丹薬作りにかかった。

厭勝師が届けたという謎の劇薬エクリタブ・プロスクタナゾには手も触れなかった。善導の指示どおり、無益無害の果実液を丹薬に混入させたのである。体裁をつくらって、沙漠の樹液と同じ紫の色彩を葡萄をしぼって着色した。

用いなかった沙漠の樹液（と称する毒薬）を捨てようかと思ったが、後日になって身の潔白を立証する品でもあるので、別の壺へとつくりうつして薬液壺をならべた棚の隅にかくしておいた。

そんなある日、皇太子の李賢が案内もなく単身で「斗姥閣」へはいってきた。白哲長身、鼻陵の高い好男子である。美人の誉れも

高かった母親韓国夫人と瓜二つ、と宮廷ではささやき合っている。

「不老不死の妙薬をつくっておいでのようですね」

賢太子は丁重な口をきいた。

「はい」

「出来上りましたか」

「だいたいのところ……」

「見せて頂けますか」

「これです」

王徐明は果実液を満たした大壺を抱えてきて太子の前へ置いた。

「沙漠の妙薬を調合したものですね」

「そうです」

「王先生は、これを試飲なさいましたか」

「いや、もったいなくて、そんなことは出来ませぬ」

「うむ……陛下に献上するわけですね」

「多分、天后がそうなさると思います」

「お願いがある」

「何でしょうか」

「献上する前に、先生ご自身で試飲してみせてやって下さい」

「わたくしが試飲してみせるんですって」

「陛下も天后も疑がわれるでしょう。毒薬ではないかと。その疑いを晴らさねばなりません」

「もしもほんものの毒薬だったとしたら、試飲したわたくしが死んでしまうことになりません」

犯人は誰か。それを突き止める重大な契機が到来したわけだ。

賢太子は冷冽な表情を崩すことなく、さりげなく言った。

「それは、簡単です。王先生は別な薬液をお飲みになったらよろしいでしょう。こうするのです」

と、壺の傍らに置かれた銀製の柄杓（ひしやく）を取りあげ、水壺の水をそこへうつして、丹薬の壺中へさし入れた。

「柄杓の裏底で薬液の面を適当に撫でまわして見せるのですね。それからこの水を飲み干しなさい。少々薬液が混入したとしても大事には至りますまい」

これで犯人は明確になった。厭勝師の明崇儼と共謀かどうかはなお不明にしても皇太子李賢がからんでいることは、まず間違ない。

「エフリタブ・ブロスクタの効き目は即座に発効するのですか」

質問する王徐明の声はふるえていた。

「即効ではないと聞いています。何日か継続して服用すると……その意味では陛下に少量。沢山めしあがってもらうのは天后ですよ。わかりますね」

「……………」

「先生を最も信頼しているわが母君なんですよ」

最後まで面上の微笑をたやさず、皇太子賢はそこまで言いきると「斗姥閣」を去りかけ

た。

太子が扉口のあたりへ達し、もう去ったと思った王徐明が見送る姿勢を戻したとき、彼は右の耳あたりをかすめる不吉な風を感じた。前面の板壁で鈍い音がした。

ぎょっとして視線を集めると、そこに鋭利な短剣が突き刺さっていた。

ふり向くと賢太子の姿が未だ扉口にあった。

「約束は必ず守って下さいよ」

「は、はい」

ゆっくりと太子は室内へ戻ってきて短剣の突き刺さる板壁へ歩み寄った。

「それと、天后に余計なことは一切言わない……………わかりますね」

「わかりました」

ゆっくりと短剣を抜き取ると、腰に吊るした鞘へおさめた。

長安城内に渦まく陰謀の实体は、単純なものではなかったようである。

その晩、則天武后は「斗姥閣」へわたってきた。不老不死薬の完成を報告すると、相好を崩し、無心に悦んだ。

「召しあがりますか」

「そうねえ。陛下に差しあげる前にお毒味をしましょうか」

王徐明が柄杓でつぐ果実液をがぶがぶ飲んだ。

「どうですか」

「まあ、おいしいこと、それに色も綺麗。これで不老不死が得られるなんて……」

この人は、世間で噂するほどの悪女ではない、と王徐明は確信できた。

ただし、悩みはまた一つふえたことになる。高宗や則天武后を毒殺する陰謀へ加担した結果になった今、この陰謀計画をいっとうやって暴露してやるか。あるいは賢太子らの強制をどのようにしてかわしてゆくかが問題であった。

八

高宗皇帝は王徐明が献じた不老不死の丹薬を食事ごとに服用するようになった。味つけだけに気をくばった果実液である。美味に満足してくれるのは当然だったかもしれない。

ところがである。十余日がすぎると、高宗は激しい眩暈をおこして倒れた。そのまま寝ついてしまった。

「ウワゴトをおっしゃって……妾のことも見分けがつかないようなのよ」

則天武后は病状をつたえた。

「医師は何と診断しているのですか」

「何か食当りだろうと言っています」

「食当りですか」

もちろんここで則天武后も王徐明も服用中の丹薬が原因だなどとは思っても及ばない。王徐明はただの果実酒であることを知っている

「柄杓の裏底で薬液の面を適当に撫でまわして見せるのですね。それからこの水を飲み干しなさい。少々薬液が混入したとしても大事には至りますまい」

これで犯人は明確になった。厭勝師の明崇儼と共謀かどうかはなお不明にしても皇太子李賢がからんでいることは、まず間違ない。

「エフリタブ・プロスクタの効き目は即座に発効するのですか」

質問する王徐明の声はふるえていた。

「即効ではないと聞いています。何日か継続して服用すると……その意味では陛下に少量。沢山めしあがってもらうのは天后ですよ。わかりますね」

「……」

「先生を最も信頼しているわが母君なんですよ」

最後まで面上の微笑をたやさず、皇太子賢はそこまで言いきると「斗姥閣」を去りかけ

た。

太子が扉口のあたりへ達し、もう去ったと思った王徐明が見送る姿勢を戻したとき、彼は右の耳あたりをかすめる不吉な風を感じた。前面の板壁で鈍い音がした。

ぎょっとして視線を集めると、そこに鋭利な短剣が突き刺さっていた。

ふり向くと賢太子の姿が未だ扉口にあった。

「約束は必ず守って下さいよ」

「は、はい」

ゆっくりと太子は室内へ戻ってきて短剣の突き刺さる板壁へ歩み寄った。

「それと、天后に余計なことは一切言わない……わかりますね」

「わかりました」

ゆっくりと短剣を抜き取ると、腰に吊るした鞘へおさめた。

長安城内に渦まく陰謀の実体は、単純なものではなかったようである。

その晩、則天武后は「斗姥閣」へわたってきた。不老不死薬の完成を報告すると、相好を崩し、無心に悦んだ。

「召しあがりますか」

「そうねえ。陛下に差しあげる前にお毒味をしましょうか」

王徐明が柄杓でつぐ果実液をがぶがぶ飲んだ。

「どうですか」

「まあ、おいしいこと、それに色も綺麗。これで不老不死が得られるなんて……」

この人は、世間で噂するほどの悪女ではない、と王徐明は確信できた。

ただし、悩みはまた一つふえたことになる。高宗や則天武后を毒殺する陰謀へ加担した結果になった今、この陰謀計画をいっとうやって暴露してやるか。あるいは賢太子らの強制をどのようにしてかわしてゆくかが問題であった。

八

高宗皇帝は王徐明が献じた不老不死の丹薬を食事ごとに服用するようになった。味つけだけに気をくばった果実液である。美味に満足してくれるのは当然だったかもしれない。

ところがである。十余日がすぎると、高宗は激しい眩暈をおこして倒れた。そのまま寝ついてしまった。

「ウワゴトをおっしゃって……妾のことも見分けがつかないようなのよ」

則天武后は病状をつたえた。

「医師は何と診断しているのですか」

「何か食当りだろうと言っています」

「食当りですか」

もちろんここで則天武后も王徐明も服用中の丹薬が原因だなぞとは思っても及ばない。王徐明はただの果実酒であることを知っている

し、則天武后は夫君とともに食後には必ず服用しているからだ。

しかし、斜眼で大奥を見つめている者たちは、そうは取らない。

その朝、東宮御所に仕える少女の一人が皇太子李賢からの伝言をもたらしした。東苑の打鞠場へ至急来い、という。拒むわけにはいかなかった。

広い草原を、太子李賢は天山の駿馬をひとり乗りまわしていた。王徐明をみとめると、馬を近づけてきた。馬上から声をかけた。

「妙薬が効いてきたようですね、先生」

「は、はい……」

「天后も飲んでおられるのか」

「食事のたびごと、召しあがっていらっしやいます」

「おかしいではないか。上（じょう）だけに効いて、天后がびんびんしているとは」

「わかりませぬ」

「先生は、天后とは特別な仲だと聞いてお

る。別のものを飲ませているのではありませんか」

「同じ丹薬を服用されています。天后のお身体は常人と異なるのではないのでしょうか」

「常人とは異なるお身体ならば、薬も処方を変えねばなるまい」

「別なものをつくるのですか」

「いや、先生がおつくりになる必要はない。

届けさせます」

「……」

「先生は、それを天后に飲ませてくれるだけでよろしい。どんな方法でもな」

王徐明は気分が深い奈落へ引きずりおろされてゆくを感じないわけにはいかなこ。生きる進路を次々に封じられてしまおうのである。

太子李賢と別れて城内へ戻ると、憚良の姿を探し求めた。いま頼りになるのはあの少年しかない。

「どんな人間が毒薬を届けてくるか、それ

が問題でしょう」

少年は怜悯な眸で沈思するようにして言った。

「問題とは？」

「つまり、そこで喰いとめてしまえば、毒藥を天后に飲ませないで済むわけですよ」

「というത്？」

「天后に飲ませるより先にその使者に飲ませたらどうですか」

「皇太子は何というであろうか」

王徐明は鬢をかすめて、板壁へ突き刺さった「投げ剣」の恐怖を思いうかべている。

「そこはわたしに任かせて下さい。賢兄さんのことは何とかします」

「それにしても憚良、人を害（あや）めることになりそうだな」

「相手も殺すためにやってくるんですよ。やむを得ないのではありませんか」

「そうだろうか……」

たしかに相手が殺人者であろうともそれを

殺す行為が是認されるのだろうか。

一時はそのまま死んでしまいか、生き永らえてもボケ人間になるか、と案ぜられた高宗皇帝が奇蹟的に意識を取り戻し、食慾も回復して歩きまわれるようになった。

則天武后は病後の養生のため曲江の離宮へ皇帝高宗を連れ去った。出立前夜の閨房で、武后は王徐明にささやいた。

「貴郎はよく見張っていて下さいよ。妾たちが留守になったあと、どんな鼠が動きだすかを」

すでに無頼詩人の駱賓天からの放言で「武后、討つべし」の狼火は聞いていたが、その火元は容易につきとめられなかったのである。駱賓王は放言をまき散らしたまま城外へ去ってしまった。

「はい……」

王徐明はうなずいたものの、すでに確証を得た皇太子李賢の陰謀を口にするにはできなかった。確証とは言っても「心証」にすぎ

ない。うっかり洩らすと、武后は必ず証固をかためるために王徐明を督励するにちがいない。

下手な動きは、皇太子の「投げ剣」を招く結果になるであらう。

則天武后たちが曲江の離宮へ去ると、じきに「黒い使者」が王徐明の前へ現れた。太子賢の手引きによったものであらう。いきなり「斗姥閣」へはいってきたのである。

それがなんと厭勝師の明宗儼であった。いや、現れた当座、王徐明は彼が黒い使者「だとは思わなかった。

明宗儼。敬意をこめた口調で鍼術の話をはじめたからである。

「王先生は針の心得がおわりかな」

初対面のころは、こんな言葉づかいではなかった。

「方士でございます。それくらいの心得は……それに蜀の国は鄙で、ろくな医師もおりませぬ。わたしどもの仕事はもっぱら鍼術や

灸の類いで」

「うむ。それは好都合です。じつはあの王后、たいへん針がお好きでな」

「王后が針を？　どこかお身体に悪いところでもあるんですか」

「そうではない。健康そのものです。先生も御承知のはずだが、王后は類い稀れな好色なお方です」

ようやく王徐明も厭勝師が何を目的としてこの部屋へあらわれたかを察することができた。

「そうですかな」

「おかくしにならんでもいい。愚生もよく存じあげています。しかも王后は並みの快樂では満たされないようです。愚生との夜な夜なでもすぐ針を打って、とおっしゃるのですよ」

王徐明にも想像はつく。

あの貪欲な武後の情動は、より強い刺戟を求めるはずだ。快樂の極限において、一瞬激

痛をおぼえる針の刺入が新たな快感を呼びさ
ますのかもしれない。

すると、この厭勝師は、針を常用して新
たな王後の快樂にたえてきたというのであろう
か。

「閨房の針はわかりました。それが、どうか
したとおっしゃるのですか」

虫ずの走るような話題だった。早く切りあ
げてもらいたい。

「この針ですよ」

明崇儼は懷中から何やら獸皮を卷いたもの
を取り出した。それを半ばひろげて示した。
数本の針が突き刺してある。

「この針を打ってさしあげるんですか」

「そのとおり………ただし、打つ前にはです
ね。針先へたっぷりこの粘膏を塗りつけて下
さい」

掌中の貝殻をさしだした。臘脂色の軟膏が
そこに詰められていた。

「これはどんな効き目をあらわすのですか」

「ご心配は要らない。王先生、注入されると
新たな欲情が体内へひろがってゆくだけです
よ。王后も先生も恍惚境にひたる事が出来
るのです」

それだけであろうか。信じられないことで
あった。その証固に明崇儼は話題を転じてき
た。

九

「王先生、ほんとうに先生はあのエクリタブ
・プロスクタをお飲ませしているんですね」

「そのとおりです」

「陛下だけに効いて、王后が元気なままと
は、どういうことでしょうか。ひとつ献上の
薬液をみせてくれませんか」

明らかに殺意をいだいている。貝殻の軟膏
だって毒薬にちがいない。

王徐明はとやさの智慧をめぐらせた。薬液

壺の棚へ歩み寄ると、ほんものの樹液を手にした。明崇儼はじっとそれを覗きこんでいたが、

「間違いない……これを飲み続けてびくともしない王後の身体は何で出来ているんだろう……いやいや、さすが沙漠の妙薬、光沢と言い、この香氣と言い、見事なものでございますな」

見えすいた言葉で言いつくろった。

「もうよろしいかなゴ」

棚へ戻そうとする王徐明の手首に触れてきた。壺を覗きこんで、

「王先生、まだ随分、残っておりますなあ」

壺内の水位を見咎めた。

「……」

「愚生が届けた分量が殆んど減っておりますん」

「他の丹薬も混入しておりますので」

「そうですか。陛下はいったん倒れられたが、じきに回復なさった。服用を中止したの

ではないですか」

「それはまあ……」

「それはそれとして先生。いまここで飲んで頂けませんか」

「……」

王徐明は相手に気づかれないうちに部屋の隅へ視線を投げた。そこには雑具にまじって一刀の剣が立てかけてあるはずだった。何か口実をもうけて、あそこへ近づき剣を抜き放って厭勝師を一突きにすることは可能に思われた。

だが、すぐにその考えを撤回した。殺生はいけないと殺されることがあっても殺してはならない。

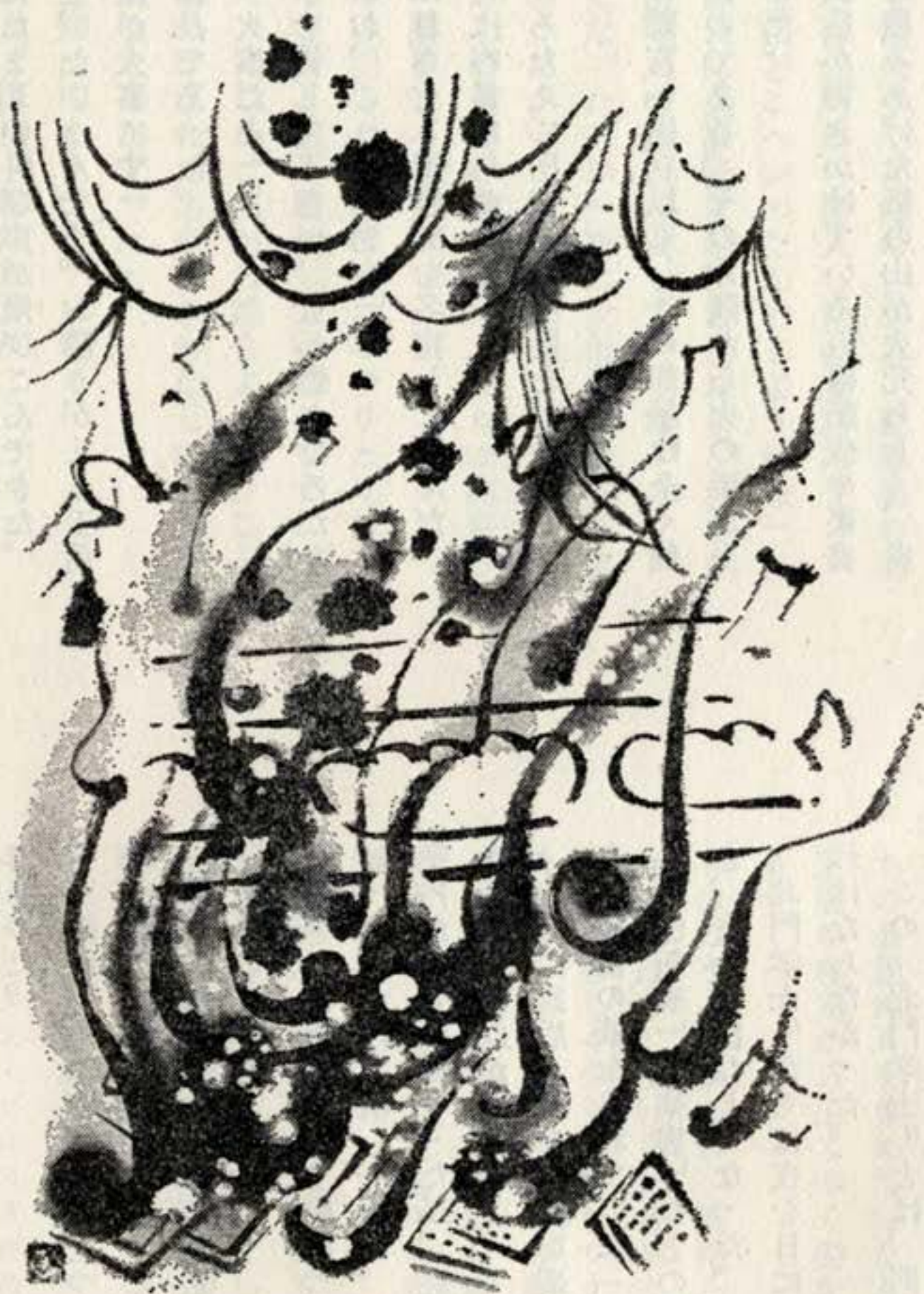
「わかりました」

王徐明は土器を持ち出すと、壺の薬液を波々と注いだ。

どんな薬効があるのか、それは知らない。即効ではなく何度か服用しているうち徐々に効いてくるそうだが、それとてもあてにはな

☆☆

炎
燒



るまい。

土器のふちに唇を触れようとした瞬間だった。けたたましい叫び声が飛びこんできた。

「王先生、たいへんです。お隣りが……王后のお部屋が火事です」

少年憚良であった。

「何だ、火事だと」

「早く手を貸して下さい。火が燃えひろがります。おお、これは明先生」

憚良は目ざとく厭勝師を名指して呼んだ。

「火事とは容易ならぬこと……」

ややうろたえて明崇儼も部屋を飛び出していった。

曲江の離宮へ出立以来、この部屋は全く無人だったのである。その片隅から火の手が上がつていた。

則天武后が書きかけている百僚新戒や楽書の草稿を積みあげた紙の山が火元らしく、炎と化した草稿の一枚一枚が「火の鳥」のように室内を乱舞していた。

すでに寝台の天蓋から吊るされた絹のカーテンにまで燃えひろがり、炎の海に近い状況であった。

王徐明たちに廊下に備えつけてある火消し棒を掴んで飛びこんでいった。熱気と煙りにむせながら、やたらと発火源らしいあたりを叩きまわった。

騒ぎに宿直の人々も駆けつけて水を運び、せっせとかけて消し止めた。炎焼は武后の寝室内だけでおさまったが、焼け跡の惨状は眼もあてられなかった。

ことに武后がその完成を楽しみにしており、最後の筆を入れていた「烈女伝」「臣軌」「百僚新戒」「楽書」などの草稿が大半を焼き、また水浸たしとなった。これの復元に「北門学士」たちは夜を日について書き改めねばならなかった。

この「北門学士」とは、則天武后がこの完成のためにえらんだ学者たちである。「北門」と呼ばれたゆえんは、宮延内にはいるた

めには南の入口で厳重にチェックされるのであるが、この学者たちは北の非常門からフリーパスで出入りできたのである。厭勝師の明崇儼もその北門から潜入したのであろう。

「明先生はどこへいったんでしようかね」

少年憚良は火事騒ぎがひととおり、おさまると火消し人の顔を点検していった。

「そうだな。たしか一緒に火消し棒を振りまわしておったが」

火事あとの雑踏を避けて、ふたりは内庭の木かげへ腰をおろした。

「じつは徐明さんとあの人とのやりとりを、わたしはずっと盗み聴きしていたんですよ」

「そうだったのか。だから都合よく飛びこんでくれたわけだね。あのときわたしは危うく毒液を飲むところだった」

「それも知ってます」

「とすると、憚良。君はまさか……」

余りにもタイミングのよかった出火騒ぎを

王徐明は疑わないわけにはいかなかった。

「誓つてわたくしではありません。じつは、廊下で斗姥閣の扉口に耳をおしつけて先生たちの会話に耳を集めていたんですが、誰かが王後の寝室から出てゆく姿を見かけたんですよ」

「ほほう、誰かがね。誰だろう」

「それは申し上げられませんが……」

めずらしく少年は口をつぐんだ。何でも打明けてくれる憚良が、である。

気がかりになって王後の寝室を覗いたら、めらめらと炎が燃えあがるのを眼にしたという。

「徐明さん。あの火がおたくの部屋へ燃えうつたらっそれこそ大変でしたねえ」

「うむ、爆発をおこすような薬液が沢山ある」

「そこで徐明さんは死んでいたでしょう」

「エクリタブ・プロスクタの力を借りないで
もな」

「それからあの明先生もね」

「明崇儼も死んでしまうことになるのかな。」

誰がそんなことを企らんだのだろう」

「思いあたりませんか。わたくしにはよく筋書きが読めないんですが……徐明さんと明先生を同時に殺してしまいたい人物は誰であるか」

「憚良。君が見かけたという人物は、よもや太子ではあるまいな」

「賢さんだったら筋書きは成立しますか」

「成立しないことはない」

「太子の王后への憎しみはどういうことになるんでしよう」

「死人に口なしだ。理屈はあとから何とでもつけられる。とにかく王後の寵愛を受けた道士ふたりが密室で焼け死んだのだ。何やら密謀をしているさなかに誤まって発火して、とでもね」

寢室の失火は、翌日早馬で曲江の離宮へ報告された。則天武后は夫の高宗を残したまま急ぎ長安城へ戻ってきた。彼女には完成寸前

の撰書が気かりだったのである。

気がかりどころか、水をかけられ散乱した草稿の山を眼にした武後の狂乱ぶりは筆舌に及ばぬありさまであった。王徐明にまで口汚たなく当り散らした。

「貴郎はすぐ隣室にいながら出火に気づかなかったのですか」

「……」

「若い女でも引っぱりこんで、楽しんでいる最中だったんじゃないの。貴郎の情夫がどこの誰であるか、とことん探がしてみせますからね。おぼえていらっしゃい」

鬼女の本性をむき出しにしてくる武后であった。

放火の犯人は皇太子李賢でしたよ、と口もとまで出かかる言葉を、王徐明はのみこんで一言も弁明しなかった。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願ひ

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜九枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十三巻 九月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和六十二年 八月二十五日 印刷
昭和六十二年 九月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二三 振替東京八一八二一八七番

五月書房選書

大正大学学長・文学博士
全日本煎茶道連盟顧問
装道きもの学院非常勤講師

安居香山 著

正坐の文化

◆煎茶道の文化とその思想◆

■永年にわたり書きためてきた、煎茶道・着物・花・正坐論を一冊にまとめ著者の日本の伝統文化観をここに開陳する。是非ご愛読下さいますようご案内申し上げます。

●推薦します●

黄 檨 宗 管 長 全日本煎茶道連盟会長	村 瀬 玄 妙 貌 下
装道きもの学院 理事長	山 中 典 士 先 生
装道礼法学院	

■内容

- 一章 正坐の文化
- 二章 煎茶道の歴史と思想
- 三章 売茶翁に学ぶ
- 四章 茶道小論
- 五章 茶と旅
- 六章 茶事漫筆

■体裁

四六判／上製／口絵二頁 定価一、六〇〇円（税二五〇円）

五 月 書 店

〒101 東京都千代田区猿樂町二一六―五

電話 〇三―二三三―四一六一

振替 東京九―三三九四三

取引銀行 三菱銀行神保町支店

当座番号九〇―一四六三

第五十三卷 九月号

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和六十二年八月二十五日印刷 昭和六十二年九月一日発行